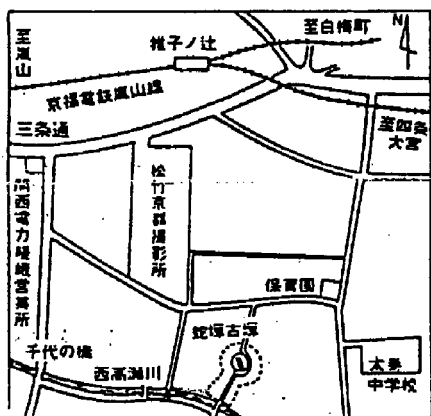


# 史跡 蛇塚古墳 (史跡指定 昭和52年5月4日)

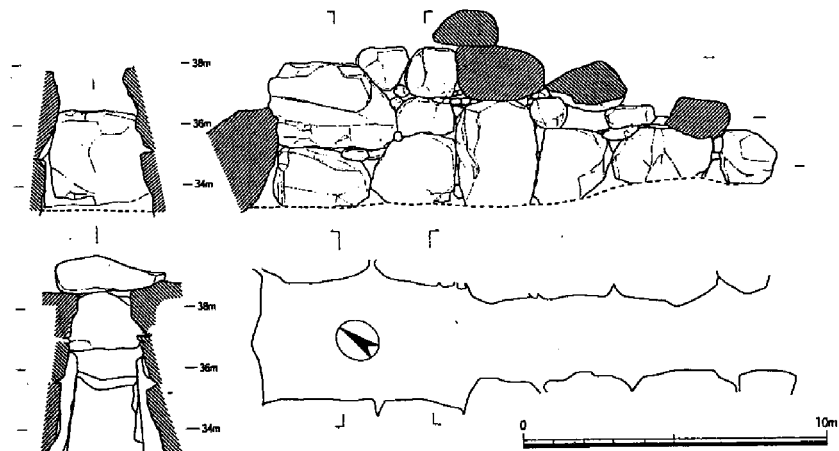
京都市右京区太秦面影町にある国指定史跡の「蛇塚古墳」は、京都府下最大の石室をもつ古墳で近くにある大塚古墳などとともに、古墳時代後期の7世紀ごろ築造されたと考えられる前方後円墳です。

この古墳が築造されたころ、この太秦一帯は、渡来系氏族である秦氏が機織や農業などを営んで栄え、広隆寺の創建や平安京造営費用の一部を負担するほどの財力をもっていました。この蛇塚古墳はその秦氏一族の墓ではないかといわれるもので、もとは全長約75mの西南向きの方後円墳でしたが、はやく封土が失われ、後円部中央にあった石室部分だけが露出して、前方後円墳の形をした周囲の畑の部分だけがやや高いという状態でありました。昭和40年ごろから石室部分だけを残して周囲に家が建てられましたが、新興住宅街の輪郭をたどると今も前方後円墳の形を残しています。

横穴式石室は後円部東南に開口しており、縦4m、横5m、高さ2.5mもある巨石など大小30数個の石を積み重ね構築されています。この石室の外観は、奈良県の石舞台古墳によく似ており、石室の規模も石舞台のそれに近く、玄室の幅は石舞台より大きく、全国的にみても奈良県の見瀬丸山古墳に次ぐ大きさです。主室である玄室の床面積では、三重県高倉山、岡山県こうもりの塚、石舞台に次ぐ全国第4位の大きさを誇っています。蛇塚の名称は、かつて石室内に蛇が多く棲息していたのでこの呼び名が付けられたものです。



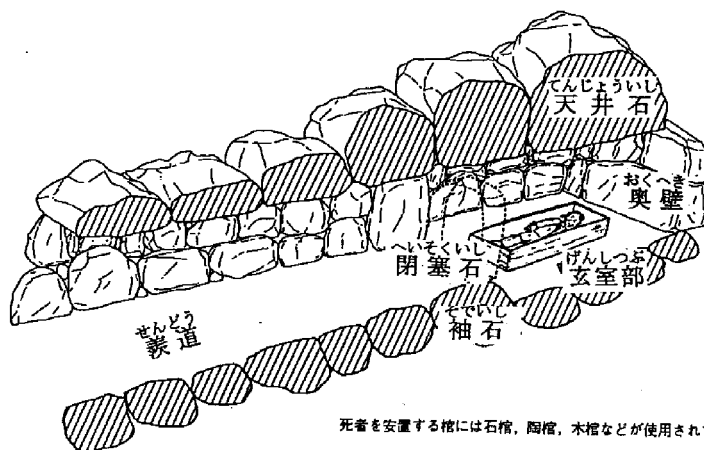
付近見取図



石室全長17.8m 玄室長6.8m 玄室幅3.9m 玄室床面積25.8㎡



古墳位置図



横穴式石室模式図